ラオスと飯舘村の物語

ドンニャイ村と深めてきた友情
「お互い様」の交流がありました

ドンニャイ村の学校に通う子ども達
（平成30年２月撮影）

ドンニャイ村とのあたたかな交流

平成21年、認定ＮＰＯ法人「アジア教育友好協会」の出前講座で、村の小学生が、ラオスの人々の心の豊かさと、十分ではない教育環境について学んだことがきっかけでした。村では小学生を中心に、「ラオスに学校を贈ろう」と募金活動やふるさと納税の呼びかけが始まり、集まった寄付金は、校舎の建設費用として、ラオスのドンニャイ村に贈られました。

そうして交流が育まれていた矢先に起きたのが、東日本大震災でした。ドンニャイ村の皆さんは、飯舘村のために祈り、米や鶏をお金に替えてまで寄付を出し合い、人づてに村に送ってくださいました。

今回飯舘村がホストタウンを担う前提には、そうした交流の軌跡があるのです。

１.村が贈った校舎が完成したのは震災後の平成24年。新校舎の開校式で、飯舘村を励まそうとドンニャイ村の皆さんが鯉のぼりに寄せ書き。
２.学校には村の名前を記した門があります。
３.平成28年には、ドンニャイ中学校の卒業生が来村。村に感謝を伝え、中学生と交流しました。

ホストタウン活動とは？

ホストタウンとなった自治体は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに参加する国・地域の人々と、スポーツ・文化・経済などの分野で交流し、その成果を地域の活性化に生かしていきます。

※ホストタウンに登録されると、特別交付税措置として、国から、交流活動の1/2の支援が得られます。

村は「復興『ありがとう』ホストタウン」及び「ホストタウン」としてラオスと交流する予定で、関係機関と調整を進めています。

練習の合間を縫って役場を表敬訪問した選手団。職員が拍手で出迎えました。

パラ水泳選手団の合宿が始まった！

よろこと ラオスの皆さん

選手団は、10日に村に到着し、宿泊体験館「きこり」で歓迎会に参加。長旅の疲れがある中、村の関係者と対面し、笑顔で自己紹介などを行いました。また、11日には村役場を表敬訪問。シビサイ団長が「村のサポートに勇気づけられます」と感謝しました。

来村したのは、７人の選手と、コーチや関係者で、選手のうち２人は、合宿後に出場する「２０１９ジャパンパラ水泳競技大会」に向けて、その他の強化選手は、来年１月の国際大会出場を目指して、この合宿に臨みました。

ラオスでは、プールの数が十分でないこともあり、練習環境が限られているそう。チームに参加するまでは川で泳いでいたという人もいました。「練習に集中できることがうれしい」と、選手は全力で強化に取り組んでいました。

学校エリアの屋内プールを使って連日の泳ぎ込み。パラアスリートは個々の身体に合わせた泳ぎ方を工夫します。ADDP（NPO法人アジアの障害者活動を支援する会）から派遣されたパラ水泳専門の指導者・小木曽充さん（プールサイド左から３人目）がコーチを務めています。